

一般社団法人

# 東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO. 51 (2025年3月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部  
事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4  
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付  
<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>  
MAIL: [okinawashibu.toyo@gmail.com](mailto:okinawashibu.toyo@gmail.com)

## 【第 83 回定例研究会記録】

日時：2025年2月15日(土) 13:00~14:40  
現地開催：沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス  
一般教育棟 1階 103教室

### 報告

「琉球古典芸能を語る一体系化と三線の課題—」  
報告者：國吉 清昂

#### ■ 報告概要

報告者は三線の「音」に魅せられ、1995年古典音楽に入門し、諸コンクールを経て特に「三線の独唱力」の向上など演奏技術を磨いてきた。1995年~2012年には、NHK 邦楽技能育成会にて、西洋音楽の教育システム採用による邦楽の発展に寄与した。そして、演奏実践30年の総決算として、古典芸能の「源泉」たるものの体系化に着手することとした。

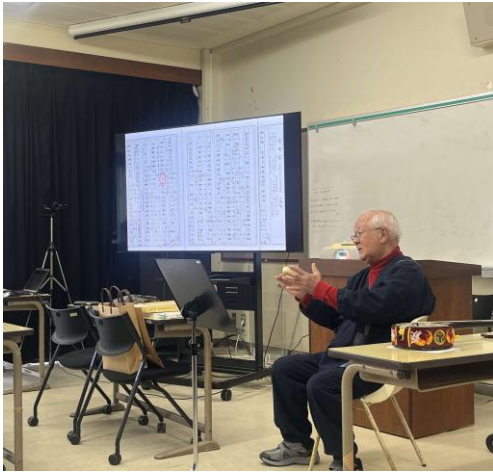
「良い音楽」のためには心地よい演奏が求められ、「遊び心」「競技する心」が必要だとの信念を持ち、三線と歌のコラボレーション(共同作業)の重要性を認識し、先師の演奏を追究し、演奏の基本が「読譜」であるとの認識に至り、地域での活動を行ってきた。そして、「良い音創り」

のためには(1)三線の音をしっかりと弾く(アポヤンド奏法⇒手を脳で管理する)、(2)三線の音に自分の声を載せて歌う(三線の音を聞きながら)、(3)歌と三線を聴く相手に届ける気持ちで歌うことが大切だと考えている。

琉球古典音楽の楽譜『工工四 屋嘉比朝寄』の解釈を通じて、琉球古典音楽の神髄には(1)詠嘆の楽、(2)中庸の楽、(3)節と詩魂の楽、(4)点と線の楽、(5)陰影の楽があり、その中核には「心の揺れ」があることを確信した。

次に、琉球古典音楽史を概観したうえで、《散山節》《述懐節》《仲節》の二揚「五節」の実演を交えて、《散山節》の「大ウチグイ」、《述懐節》10行四コマ目の「テンポプリモ」(曲、節の初めの速さに戻る)の存在、《仲節》の節の総てを簡略した表現である「歌持ち」における「驚嘆し息を吸い込む表現」が読譜によって明らかになることを指摘する。

近年、琉球古典音楽の中核を為す「三線」諸コンクールや演奏会等を拝聴しても、聴く人に音楽の持つ本来の演奏形態の理解が足りてないような所感がある。学究的な研究に基づく解釈とその発信により、伝統が継承されることが重要だと考えている。



(写真1：國吉 清昂氏)

### ■傍聴記

國吉清昂氏は、屋嘉比朝寄（1716～1775）が編み117曲を収録した琉球古典音楽の楽譜『工工四屋嘉比朝寄』（以下、『屋嘉比譜』）を解釈し、2009年『聲楽譜附 屋嘉比朝寄工工四』（以下、『研究譜』）として現行の聲楽譜と工工四譜の手法に則って活字資料化した。本報告は、國吉氏がこれまで培ってきた琉球古典音楽に対する知の総集編と位置づけられ、各譜の工工四をプロジェクターで投影しながら自身による演唱を交えて、各譜の比較や演奏解釈が行われた。具体的に取りあげられた演目は、琉球古典音楽の《干瀬節》、《子持節》、《散山節》、《仲風節》、《述懐節》である。

國吉氏は、《干瀬節》が『屋嘉比譜』の《干瀬仁居鳥節》に見る「永遠の離別」をテーマとすると解釈し、『研究譜』では「七」の「打ち音」として表現し、『野村流音楽協会 聲楽譜附工工四』では、旋律の終わりの扱いに注目した。《子持節》では、『屋嘉比譜』に「永遠の離別と自責の念」を見出し、『研究譜』では「七」の「打ち音」に離別の一瞬の躊躇を表現していると指摘した。《散山節》には、「合中工」の部分に、「茫洋としたなかでの確信の想い」を見出した。《仲風節》は、歌待ちに「喜びの表現」があるとし、組踊などの道行の場面で速度が遅くならないことが望ましいと述べた。《述懐節》では、「四工中」の部分でテンポプリモ（最初の速さ）とする解釈が示されたほか、組踊「手水の縁」に採用された《仲風節》《述懐節》が

『屋嘉比譜』に収録されなかったことへの見解も示された。そして、歌と三線の演奏の結びつきの重要性和琉球古典音楽の三線奏者に求められる力量等について持論が展開された。

参加者からは、各曲に潜む物語性や《述懐節》におけるテンポプリモ（最初の速さ）の表現といった独自の解釈を新鮮に受けとめたといったコメントが寄せられた一方、國吉氏のいう琉球古典音楽の三線奏者の力量が、西洋音楽的な基準に拠っていることへの疑問が提示された。これに対して、國吉氏は両者の交流について述べた。また、琉球古典音楽の将来にとって、豊かな音色による三線の演奏技術開発が求められることを強調した。報告者は、琉球古典音楽の専門ではないが、國吉氏が『屋嘉比譜』などの活字化のプロセスや自らの三線演奏や指導を通じて、琉球古典音楽に対するさまざまな演奏解釈の着想を得たことがわかった。しかしながら、各曲に潜む物語性の根拠として示されたのが、それらを採用した組踊のストーリーであった点については、もう少し説明がほしかった。また、國吉氏は琉球古典芸能の源泉として、感受性、受容性、柔軟性をあげたが、本報告における事例と結びつけて論じていただけると、より理解が深まったのではないかと感じた。

報告：小西 潤子（沖縄支部）

### 研究発表

「故郷をつなぐメロディー—ハワイの沖縄救済活動とBEGINの《ウルマメロディ》—」

発表者：遠藤 美奈（沖縄支部）

### ■発表要旨

本発表は、戦後の沖縄の復興に欠かすことができない、沖縄系移民らによる沖縄救済活動に着目し、その中で実践された芸能とその後の展開を考察した。ここでは、ハワイを事例として邦字新聞やラジオ放送局等を通じて紹介された演芸会や沖縄音楽を主に取り扱った。加えて、人から人へ重要な物事を伝えることができるという観点から、

芝居や音楽といった「芸能」を一種のメディアとして捉え、戦後の沖縄芸能が情報伝達の側面で果たした役割にも注目した。

沖縄救済活動とは、第二次世界大戦後、焦土と化した故郷沖縄の復興を目的に、各国の沖縄系移民らが多様な物資や金銭などを支援するために助力した活動の総称である。

さて、こうした救済活動には芸能が用いられた。その動向をたどっていくと、現在のように沖縄系移民がハワイで沖縄の文化芸術活動を活発化させる契機の一つが見えてきた。これらの動向を、①窮状を伝える②呼びかける③自らの功績を讃える④「沖縄」の音楽が広がる⑤記憶を呼び戻す、の5つに分けて考察した。

動向を端的にまとめると次の通りである。①では琉歌（歌含む）に着目した。沖縄戦で通信兵だった帰米二世の比嘉太郎は、新聞で沖縄の惨状をハワイへ伝えるとともに中城村島袋収容所で書き取った琉歌を記事に添えた。沖縄の惨状を詠んだ琉歌は、節歌（八重山古典民謡）に乗ってハワイの三線弾きの間に広がりを見せた。それは同時に沖縄の惨状を伝えるメディアとなって各島へと伝播し、救済活動の機運を高めた。②は戦後ラジオ放送の復活により、沖縄系移民が番組（時間枠）を買い上げ沖縄救済活動の重要性を発信し続けた。そこには、ハワイ在住の琉球古典音楽家らが生演奏で参加し、救済活動を支えたことがわかった。③はハワイで創作された沖縄芝居の誕生である。奇しくも沖縄芸能が盛んになることで、立方や地謡が育ち、(琉)狂言、組踊なども移民先で上演できるようになっていった。さらに重要な点は、新たな作品のなかでハワイ移民による救済活動の様子を描写したことにある。これが、さらなる支援につながったと思われる。これらの現象は④につながり、ラジオコンテンツとして「沖縄」音楽が各局の目玉番組となり、沖縄系出身のラジオパーソナリティーも多く生まれた。やがて、時代は下り救済活動が収束すると人々の記憶は薄れていった。だが、「戦後」が終わらない沖縄では、沖縄復興の記憶の掘り起こしが今なお行われ続けている。そこで⑤として BEGIN が、②の救済活動のラジオ

番組名を曲のタイトルとし、③の沖縄芝居の主題歌への返答を歌詞にした事例を取り上げた。

このように、厳しい時期なくして今日のハワイの沖縄芸能の興隆はなかったかもしれない。相互ともに薄れていく記憶は、どちらかの記憶を掘り起こすことができれば、相互に語り継げるかもしれない。当時の救済活動への返礼歌は、沖縄系移民との新しい架け橋となり始めている。



(写真2：遠藤 美奈氏)

#### ■傍聴記

本発表は、芝居や音楽といった芸能を「人から人へ物事を伝えるメディア」と捉え、太平洋戦争終結間もないハワイにおいて沖縄系移民が行った沖縄救済運動における芸能と、それが時を超えて展開していく様子を概観する内容であった。沖縄救済活動とは、地上戦により焦土と化した沖縄の復興を目的に、ハワイをはじめとする北米や南米の沖縄系移民らが行った物資や金銭の支援活動のことである。この沖縄救済活動の一環として演芸会がしばしば開催され、その芸を通じて沖縄系移民は故郷・沖縄を想起し、連帯感を強め、救済への協力を惜しまなかったという。本発表では、その救済活動の演芸そしてその後の展開を、1. 窮状を伝える、2. 呼びかける、3. 功績を讃える、4. 「沖縄」音楽が広がる、5. 記憶を呼び戻す、という五つの段階に分けた。

1900年に始まる沖縄からのハワイ移民は、戦中・戦後にはすでに二世代目に入っており、「アメリカ人」としての教育や生活様式を身につけて

いた人も少なく無かったと考えられる。一方で、移民初期から続く日本本土出身者と沖縄出身者の間にある「日本人」としての溝に加え、戦中にはアメリカの日本移民排斥運動に苦しめられた。戦後まもない時期の沖縄系ハワイ移民にとって、自らの「ネーション」の所在がアメリカなのか日本なのか、複雑な思いがあったであろうことは想像に難くない。そのような状況の中、戦争で焦土と化した沖縄を案じ、その復興を支えることを通じて、沖縄系移民は出自の「沖縄」をアイデンティフィケーションし、連帯感が強化されたのだろう。沖縄を伝えるツール＝メディアの役割を芸能そのものが担い、しかも終戦直後だけでなく現代にまで音楽を通じて沖縄救済運動のことが語り継がれている、という発表者の視点は興味深かった。

質疑応答も活発に行われた。まず、ハワイの邦字新聞記者の出身について質問があり、それに対し発表者からは、沖縄系以外の記者もおり、とくに沖縄の言葉の表記に関しては誤字も多いため、分析の際にはある程度の想像も含めて検討しなくてはならない、と回答があった。また、ハワイでは八重山や沖縄本島など各地の民謡をどのように認識しているかという質問には、地域やジャンルを分けて認識しておらず、来布した民謡歌手が「石垣島出身で八重山の歌を歌う」と自己紹介しても、ハワイの観客はピンときていないのが実情だろう、とのことであった。続けて、ハワイの沖縄救済活動における芸能の実践による援助は実際にはどの程度あったかとの問いには、例えば沖縄芝居『伊江島ロマンス(伊江島ハンドー小)』の上演で500万円程度、他の演芸大会で集まった義援金もすべて寄付された、との回答があった。

最後に、ハワイの沖縄系移民のエスニックグループはどう括られているのか(「日系」括り/「沖縄系」と「沖縄系以外」括り)という質問があり、発表者からは、かつては「日系人」であるべきとして日系社会にコミットしようとしていたが、現在では「我々はジャパニーズではなくオキナワンである」という意識が大半だろう、という回答があった。これに対し、1967年から約10年間ハワイに住んでいたという会員から、「自身がハワイ

に住んでいた頃は三世の時代だったが、まだ「日系」という考えがあった。しかし、当時はまだ差別意識がかなりあり、沖縄系の女性が他県の男性と結婚するときに反対されたりした。沖縄系の中でも、小祿字人会や中城村人会などグループ細分がとても強かった。少なくとも70年代はまだ「沖縄」を強く前に出す状況になかったように思う」とのコメントがあった。

報告：長嶺 亮子(沖縄支部)

——沖縄支部からのお知らせ——

◆ 第84回定例研究会情報

次回定例研究会の開催日時等は、2025年6月上旬を目途にメールにてご案内さしあげる予定です。

◆ 第84回定例研究会発表募集

定例研究会での研究発表を募集しております。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先を明記の上、2025年5月2日(金)までに東洋音楽学会沖縄支部のメールアドレス([okinawashibu.toyo@gmail.com](mailto:okinawashibu.toyo@gmail.com))までお申し込みください。郵送の場合は、同日必着です。

発表希望のメールを送信後、1週間を経ても沖縄支部からの返信がない場合は、お手数ですが再度ご連絡ください。

(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 51 編集委員

遠藤美奈、鈴木杜萌、高瀬澄子、

多和田真理、塚原健太

次号 No. 52 は 2025 年 9 月に発行予定